

虹の里:集合写真



Nishino no Sato

調教用ゼッケンで想いをつなぐ オリジナルバッグ

茨城県・社会福祉法人美しの森理事 障害者支援施設虹の里 施設長
八木澤 健仁

虹の里のあゆみ

社会福祉法人美しの森は、障害のある子を持つご家族の有志の方々の熱意により、1997(平成9)年に、茨城県的美浦村に設立しました。

法人が運営する障害者支援施設虹の里やグループホームの大部分は文化財保護法に定める「埋蔵文化財を包蔵する土地」として周知されている場所にあり、まだ海が近かったとされる古墳時代(約1,500年前)の人びとが住んでいた痕跡(竪穴

住居跡や土器)が多数出土されるなど、古代ロマンあふれる場所に立地しています。

この地に虹の里が開所したのは法人設立の翌年で、当時は郡内初の「精神薄弱者更生施設」(当時)でした。後の制度改正により「障害者支援施設」に改称されましたが、22年が経過した現在でも郡内唯一の入所施設として、隣接する相談支援事業所やグループホームと併せて、地域では事業規模の最も大きな障害福祉サービス事業者(拠点)としての役割を果たしてきたと自負しております。

美浦トレーニングセンター



生活介護における「生産活動」としての位置づけ

虹の里は開所以来、最重度・重度の知的障害のある方々の日常生活支援に特化して運営してきましたので、入所者40名は全員が障害支援区分5・6の重度知的障害のある方々です。従って、日中活動の取り組みは、隣接のグループホームから合流する通所者10名と共に、野菜のビニールハウス栽培や環境整備、企業から受託した作業の他、一人ひとりの障害特性に応じた創作活動やレクリエーション活動を行っています。また、過度な負担が掛からないように作業時間も正味2時間30分として、作業担当の生活支援員が小まめに利用者の状態観察を行うなどの配慮を講じています。

JRA(日本中央競馬会)との関わり

虹の里がある美浦村は、現在の人口規模で県内44市町村中3番目に人口の少ない小さな村です。この小さな村に1978(昭和53)年、競走馬の鍛練・調教を目的とした日本最大級の規模と設備を誇るJRA(日本中央競馬会)美浦トレーニングセンター(以下、美浦トレセンと略)が開場しました。しかし当時は、当法人とは桁外れの事業規模であることや、住んでいる世界がまるで違うという意識が先に立ち、何かしらでも関わりを持つ機会などはないであろうという思いを持っていました。

ところがその後、関西地区にある障害者施設において、JRA栗東トレーニングセンター(滋賀県栗東市)のご協力によって競走馬の調教用として使用済みとなったゼッケンをバッグへと加工する取り組みを、JRAの美浦トレセンでもご協力いただけるという話になり、この取り組みの仲立ち役となった茨城県共同受発注センター(茨城県心身障害者福祉協会)から、同

じ村内にある当施設にお声かけいただいたことがご縁の始まりとなりました。

虹の里の作業分担

競走馬調教用ゼッケンが、お客様に販売できる状態の「ゼッケンバッグ」に生まれ変わるまでには、いくつかの作業工程がありますが、虹の里では第1次的な作業工程である「選別」「在庫管理」「洗浄(洗濯)」「付属品の取り外し」を行っています。この工程を経て、初めてバッグに加工できる状態のゼッケンとなり、第2次的な作業工程(縫製等)を担当していただく取引先(施設・企業)にお届けするまでの責任を持ちます。

ゼッケンの色は競走馬の年齢によって「黄・黒・緑」3色に分けられますが、特に美浦トレセン独自カラーである「黄」は関西の取引先から人気のある色です(滋賀県の栗東トレセンのカラーは緑に白の数字)。

使用済みとなった(加工前の)ゼッケンは、引き取りの際に職員がその場で製品に加工できるものと、そうでないものを確認・選別します。ゼッケンは、激しい調教を終えた痕跡が残っているため、汚れや破れが起きたり、馬毛や汗(馬は人間と同様に最も汗をかく動物の一つ)が付着しているものもあります。特に「破れ」や「激しい汚れ」が目立つものは販売には向きませんので、製品として加工できるものとそうでないものを選別し、施設で大切に保管します。これを利用者が手作業で丁寧に洗濯とブラッシングを施したのち、天日干しをします。

利用者が取り組む作業自体に特に危険な工程はありませんが、最も時間を費やす「糸ほどき」の作業では、やや鋭利な道具を使用することから、道具を安全に取り扱えることが求められます。また、ミシンで



ゼッケンを洗う作業



付属品外し